われらが風狂の師

下

青山光二

新潮社版

われらが風狂の師（下）

青山光二

新潮社版

われらが風狂の師（下）

著者　青山光二

昭和五十六年七月五日印刷
昭和五十六年七月十日発行

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定価　一一〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・株式会社金羊社　製本所・新宿加藤製本株式会社
© Kōji Aoyama Printed in Japan 1981

われらが風狂の師（下）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

翌日の朝、
「今日は、小林秀雄のところへ行くつもりだ」と土岐は云って、粟津則雄の顔を見た。「この前、文学の話は何もできなかったからね。きみも、いっしょに行かないか」
「風邪気味ですから、ぼくは遠慮します。どうぞ、お一人で——」
風邪気味で微熱があるのは事実だったが、あながちそのために土岐の誘いをことわったのではなかった。相手の都合も迷惑も頓着せず、むやみと押しかけていく土岐の訪問癖のおつきあいはごめんだと、粟津は思ったのだ。もともと、ひとを訪ねるのを好まぬたちでもあった。
土岐の方は、にべもなく弟子に同行をことわられて、少しばかり不機嫌な表情になりながらも、身支度をして、いそがしそうにアパートを出ていった。
お茶ノ水についたのが八時半、そのまま鎌倉へ直行したのでは、小林邸を訪問するのに、いくらなんでも時間が早すぎる。そう判断して、ラッシュ・アワーのお茶ノ水駅をそとへ出た土岐は、弟子の徳弘弁護士の事務所のある須田町の方へ歩きだした。
都電の通りに面した、間口の狭い三階建のビルの二階にある法律事務所に、徳弘忠一は、すでに出勤していた。
窓際に設けた接客用のコーナーの椅子に、弟子と対い合って坐るなり、土岐は云った。
「どこかで蓄音器を売っていないかね？」

「レコード・プレヤーですね。楽器店にあるんじゃないですか。お買いになるんですか？」
「音楽好きの愛人にプレゼントするんだ」
「朝っぱらから、先生には、あてられますなぁ」徳弘の方が照れて、笑った。「ポータブルのでよろしかったら、うちにあるのを差しあげましょうか。どうせ、使わないんですから——」
「そうかね。そうしてもらえると、ありがたい」
「神保町のマドンナに使っていただけるのなら、光栄のいたりですよ」
鈴木ユリのことを、実は土岐は、菩薩のような女だと語ったのだ。徳弘の記憶のなかで、菩薩が聖母マリアにすりかわっていた。土岐は、そのときユリのことを、タブラ・ラーサ〈白紙〉のような魂を持っているとも云った。その上にどんな絵でも描くことができるという意味だろうか。
出されたお茶をのみほすと、やがて土岐は、
「じゃあ、明日、また来るよ」
そわそわと腰をあげて、事務所を出ていった。
あっけにとられた顔つきで、徳弘は、事務机の前に腰をおろしながら、
（蓄音器の用件だけで、土岐さん、ここまでやってきたんだろうか？）
と、つぶやいた。そして、ろくすっぽ会話らしい会話は行なわれずじまいという、妙に中途半端な、吹っきれない、旧師来訪の後味を持て扱うのだった。
土岐が徳弘の事務所にいた時間は、十分にもみたなかった。
（滞在喪失性という言葉を、どこかで見たことがあったな。法律書ではないな。何の本で読んだのかな。……）
弁護士はしきりに首をかしげたが、乱読の傾向のある彼は、読んだ内容を記憶していても、それをどの本で読んだかということになると、容易に想い出せないのである。滞在喪失性というのは、実は、ハイデッガーの造語だが、精神病理学者もよく使う。例えば、躁病者はただ瞬間にのみ生き

ており、実存的にいえば、滞在喪失性のなかに生きているのだ、といった具合に。
滞在喪失性という言葉を土岐の行動に重ねあわせて想いうかべたのは、いかにも勉強家の徳弘弁護士らしい頭のはたらき方といえたが、たしかに行動の上で滞在喪失的傾向のつよい土岐も、粟津則雄や鈴木ユリとの関係において見るかぎり、滞在喪失どころか、滞在喪失の逆方向の現象を呈しているとしかいえないのだから、仮りに滞在喪失性といった概念ばかりで彼の躍動する内面を規定するとすれば、過誤となるおそれがあろう。
土岐は、ほとんど本能的に、徳弘弁護士の事務所へ足を向けたのだ。惜しみなく好意をふるまってくれる徳弘忠一のところへ、蜜をしたう蟻のように押しかけていくのは、何よりもそこに、自己愛の満足が待っていると思えるからであった。だから、この上もなく明確に自己のための訪問であった。そのためかどうか、訪問のための訪問に似た、それこそ滞在喪失的訪問であったが、期待にたがわず、相手は好意をふるまい、自己愛の満足も土岐は果たすことができたという次第だった。
といっても土岐は、蓄音器をたかる気で徳弘弁護士を訪ねたのではなかった。あくまでも、結果としてそうなったのだ。
蓄音器を買ってあげると鈴木ユリに約束した後、きのうは一日、出版社まわりにいそがしくて、楽器店を覗いてみる暇がなかった。もっとも、どこに楽器店があるのか、その心当りもなかったのである。
出版社まわりにいそがしいといっても、ほんらい顔を出す必要もないのに、顔を出してあるくのだ。しかし、社長なり担当編集者なりを相手に滔々と観念的なことを弁じているうちに、また新たな出版の話がまとまったりすることもあるので、土岐の出版社遍歴は、まんざら無用のこととばかりもいえず、あんがい効果があるのだった。昭和二十三年四月に上京して以来、土岐のめまぐるしいほどの行動範囲のうち、いちばん頻繁に彼の訪問をうけているのは出版社であった。
三省堂の脇の横丁の入口で鈴木ユリと別れた後、彼は電車通りを渡って、おなじ神保町の西神田

寄りの裏通りにある評論社を訪ねた。そこからは書き下ろしの『愛情の道化と救済の智慧』が六月か七月に出るはずで、その前に旧著『「ツァラトゥストラ」羞恥・同情・運命』も再刊されることになっていて、間もなく本ができる様子だった。ところが、原版を出した岩波書店に再刊のことをことわらなくてもいいのかということが土岐は急に気になりだしたのだ。

その点について評論社では、岩波の出版権有効期間はとっくに切れているのだから、再刊にあたって許諾をもとめる必要はないはずだが、著者が気がかりなら、先方に声をかけるくらいのことはさせていただくと云った。

土岐は評論社の社長や編集者を相手に、ニーチェはゲーテの直系の弟子ともいえるので、両者の関係は切っても切れないといったような意見を熱っぽい口調で述べ立てているうちに、話がはずんで、〝ゲーテのヒューマニズム〟というテーマで一冊の本を書き下ろすということになった。

三百枚や四百枚のエッセイを書き下ろすのは、たいして手間のかかる仕事ではないと土岐は思っているから、頼まれれば、かんたんにひきうけるのだ。荘文社から、これも間もなく出版される手順になっている『悲劇性への意志』を書いたときなど、書こうとする想念がどんどん先走って、追っかけて文章にする筆が追いつきかねる想いの連続だった。だから、昼夜兼行で稿を急ぎ、三百枚余の原稿を書きあげるのに一週間とはかからなかった。文章の表現に骨身を削って苦労するというようなことは、彼は、した例しがない。

評論社のある神保町二丁目から、西神田をこえて、裏通りをまっすぐ行った三崎町二丁目に糸書房があった。ここの女社長は、男まさりで遣り手の経営者タイプで、土岐をだいじにしてくれた。糸書房とも、エッセイを書き下ろす約束をしていたが、何を書くかということさえ土岐はまだ考えてはいない。だいじにしてくれるから、相手を甘く見るのだ。

原稿は一枚もできていないのに、女社長の顔を見るなり、土岐は三千円の印税前借りを申し入れたが、これも相手を甘く見ている。その上に、不当な前貸しを要求したりするだらしなさや無羈絆

というものが、文筆業のアモラルなおもしろさだと勘違いしている土岐の無知から来る甘えがあった。ところが、相手の女社長は、

「土岐先生にお小遣をせびられるなんて、光栄ですわ」

と、にこやかに笑って、三千円を持ってくるよう会計係に命じたものである。

これでは土岐は、ますますおもしろがって、つけあがるばかりだ。

糸書房のあと、お茶ノ水に近い湯島にある新月社まで、土岐は足をのばした。この出版社とも書き下ろしの約束をしていたが、まったく手をつけていないのである。

土岐が新月社をしばしば訪れるのは、訪問のための訪問というよりも、むしろ、行けばかならずめずらしい最中(もなか)や生菓子を出して、もてなしてくれるからであった。彼は、とりわけ甘い物が好きだった。

……小林秀雄邸では、玄関払いをくわされた。玄関へ出てきた小林と二ヵ言三言、会話の応酬があったかと思うと、先方の態度がにわかに険悪となった。

四、五日前に来たときの歓待ぶりとは打ってかわって、剣もほろろを通りこした高圧的な応対であった。論争でもしている気だった土岐は、

「帰れ」

と、断ち切るような言葉を、頭から冷水でもかぶせるように、いきなりあびせかけられて、とりつくしまもなくなった。

若宮大路を鎌倉駅の方へ引返しながら、

(小林はおれのことをバカ野郎と云った)

激昂した頭で、土岐は、しきりにそうつぶやいた。小林秀雄がじっさいにバカ野郎呼ばわりして罵ったのかどうかは問題外で、土岐の頭のなかでは、そういうことになっているのだ。そして、小林邸の玄関先で、どのような会話を小林と交したのであったかは、都合よく、土岐の記憶からはす

っかりぬけおちてしまっていた。
夜になって、粟津則雄のアパートに帰った土岐は、
「小林秀雄は文学者でもなければ、批評家でもないね」と口をゆがめて、吐きだすような語調で云った。「彼のドストエフスキー論には独創性がない」
粟津は、軀が熱っぽくて、だるかった。土岐の独り合点な毒舌にうんざりしながらも、調子をあわせるつもりで、
「しかし、ランボオの翻訳は、パトスがあって、みごとな作品ですよ」
「『地獄の季節』か。あれは誤訳だらけの、でたらめだ。きみが訳すといい。きっと、小林よりずっといい訳ができるよ」
「いつかやりたいとは思ってますけど」
「あいつは俗物だよ。話にならん俗物だ」
「小林さんが俗物だとすると、きっと、大俗物ですね」
粟津が自分といっしょになって小林秀雄をこきおろさないのが土岐はたいそう不満らしく、眼鏡の縁の上から相手を睨みつけるような目つきになったが、そのうち、布鞄から新聞紙にくるんだ黒砂糖のかたまりを取り出すと、手づかみにしたそいつをかじりだした。
肩から掛ける紐のついた小型の布鞄は、二、三日前から土岐が愛用している、明らかに旧陸軍の軍装用の雑嚢で、どこかの闇市ででも入手したのに相違なかった。兵隊鞄には、二、三冊の本のほか、コンテ、パステル、消ゴム、鉛筆、万年筆、ナイフ、鋏といった小道具から、まいにち粟津のところへ帰ってくるのだから持ちあるく必要のないはずの歯ブラシ、石鹸、タオルのたぐいまでがはいっていた。つまり、肩から斜めに兵隊鞄を吊ってカルトンを抱えているのが、このところ、外出時の土岐数馬の恒常的なスタイルであった。
黒砂糖のかたまりをかじりだした土岐を見て、空腹なのだろうと粟津は察したが、さて、食べさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

せる物は何もなかった。粟津自身も、夕食らしい夕食をとってはいない。大学の帰りに、池袋の闇市で雑炊を食べて、それが夕食の代りだった。サツマイモが二、三個と林檎が一個あったが、さしあたって、明日の朝食用にとっておかねばならなかった。

黒砂糖をかじっている土岐は、痩せて筋張った青黒い顔がやつれてはいたが、それでいて、見るからに生気にみち、皮膚にぬらぬらと脂が浮いていた。

（猫の活力……）

と机の前で粟津は、感じ入ってつぶやくのだったが、それというのが彼自身は、どんよりと重い疲労感と消耗感がにわかに軀ぜんたいをひたしてくるのをおぼえていたのである。

土岐は、粟津則雄のアパートにちょうど十日間ほど滞在した。滞在をきりあげたのは、粟津が高熱を出して寝込んでしまったためである。

……店をあけたばかりの「らんぼう」で、鈴木ユリにレコード・プレヤーを手渡したあと、その日いちにち、土岐は幸福な気分で、うきうきしていた。愛しい女に贈り物をし、そのよろこぶ顔を見ることが、このようにもわが心のよろこびとなろうとは！　はじめての経験であるだけになおさら、そのことは、大袈裟にいうと天にも昇るような気持に彼をさせていた。

徳弘弁護士が家から事務所へ運んできてくれたポータブル・レコード・プレヤーは、どこにも傷んだ個所などない新品同然の品であった。

だから、贈られた鈴木ユリは、土岐が楽器店でその品を買ってきたとしか思っていなかった。土岐にしても、貰い物であるとわざわざことわる必要もないことだ。問題はむしろ、貰い物を弟子からうけとる土岐の態度にあったかもしれない。徳弘弁護士の事務所に客があって、傍で見ていたとしたら、おそらく、弁護士が土岐から借りていたレコード・プレヤーを返していると思ったかもしれない。土岐の態度は、当然うけとるべき物をうけとっているといったふうだったからである。

鼻歌でもうたいだしそうな陽気な面持で、板橋の粟津則雄の部屋へ土岐が帰ってきたのは、いつになく早い、まだ夜には少しばかり間のある時刻だった。だから、西側に向いた硝子窓からは薄暮れどきのほの明りが射しこんでいたが、明りはそれだけで、電燈も点けていないので、部屋のなかは薄暗い。

薄暗いなかで、粟津は蒲団をかぶって、唸っていた。

「どうしたんだ、きみ」

土岐はしゃがみこんで、声をかけながら、覗きこんだ。粟津は額に濡れタオルを載せているので、触れてみると、湯にひたしたように熱くなっている。ひどい熱だ。

「池袋のマーケットに、うまい天丼を食わせる店があるんだ。きみを連れていこうと思って、帰ってきたんだ」

「……先生、どうぞ行ってきてください」

「起きられないかね？」

「だめですよ」粟津の声は、発熱のために潤んでいた。「朦朧としてます」

そうか、だめか、というようにうなずいて、それでも土岐は、弟子の額から濡れタオルを拾いあげると、手のとどくところに新聞紙を敷いて置いてある、水をみたした洗面器に浸けた。

「風邪をひいたのかな。悪質の熱病でなければいいがね」

「だいじょぶですよ」苦しそうな声で、粟津は、やっと云った。「しかし、うつるといけませんから、先生、お寺へ帰ってください」

「……」

「ほんとに、そうしてください」

洗面器の上でタオルをしぼりながら、土岐は、そう云われるといかにも、ここにいれば熱病が、かならずうつりそうな気がしてきた。すると、彼においては、熱病の伝染を恐れる気持の方が、高

熱に喘いでいる弟子の身を案じる気持より、無条件に先なのであった。
医者を呼びにいくとか、応急の解熱剤を買いに薬局へ駈けつけるとかいった配慮は、その気配すら彼の心にはうかばないのだ。そのようなことをされたことはあっても、したことはないからであろうか。
まして、自分の同居によって粟津の生活が異常にかきみだされ、不眠や気疲れの積み重なったことが、おそらく彼の発熱の最大の原因であることには、土岐は一向に気づいていなかった。
いいかげんなしぼり方をした濡れタオルを弟子の額に置きながら、
「じゃあ、きみの云うようにするがね、ほんとにだいじょぶかね」
「ぐっすり眠れば、なおりますよ」
「だいじにしたまえ」
土岐は、思い出したようにポケットから、くしゃくしゃの百円紙幣を何枚かつかみ出すと、五枚をかぞえて、弟子の枕の下へ押しこんだ。
彼のネグラであった押入れ上段から、団子にまるめた毛布が、はんぶん垂れさがったままであった。

ちょうど二週間ぶりに上高田の境妙寺へ帰ってみると、何通かの郵便物がとどいているほかに、机の上には、ノートから破りとった紙片に走り書きした園部梢の置手紙があった。

信濃追分の爽やかな自然の中で、お仕事、如何でございましたでしょうか。さぞ、おはかどりになられたことと、それのみ楽しみにして居ります。
お帰りになり次第、お電話で御様子をお知らせ下さいませ。お願いします。

五月六日　園部　梢

梢は、新宿の喫茶店リンデンの前で別れた土岐が、翌日にでもまた、信濃追分へ引返したものと思いこんでいた。そのあと、日本橋の社へ出勤の途次、何度か境妙寺の庫裡を覗いてみたが、いつも土岐は不在なので、なおさらそう思いこんだわけである。最後に境妙寺へ寄ったのが五月六日だった。追分滞在一週間をこえる土岐は、おそらく仕事に身を入れてくれているのだろうと梢は想像した。それからさらに二日が経っている。

土岐は、梢との仕事の約束を忘れているわけではなかったけれども、東陽出版社のために一冊分の原稿を書き下ろそうという気は、もはや彼のどこにもないのであった。担当編集者との心の交流や相互理解という人間的結合の上に立ってこそ作品は書けるので、それがなければ、書けもしないし書く意味もないと、土岐は考えている。そして、園部梢との心の交流や人間的結合と彼が勝手に考えていたものは、彼において、とっくに一方的に断たれていたのである。理不尽といえば理不尽な話である。園部梢にしてみれば、彼女が人間的結合をやぶって離反したというおぼえは何らあるわけがないのだ。

ところで、あれほど、寝た間も忘れぬほど想いを焦がして恋いこがれた相手のことを、べつの愛しい女に出会ったとたん、けろっと忘れ去ったかのように、醒めはてた気分で想いうかべることができる心の状態となっている土岐の変化は、ふしぎなようでいて、実は恋愛感情の生きて動くすがたのあざやかな一つの典型を示しているのかもしれなかった。

留守中にとどいた郵便物のなかには、発売されたばかりの文芸雑誌「新潮」六月号もあった。手にとってみると、扉ページのつぎの第二ページから太宰治の『如是我聞』第三回が四ページにわたって掲載され、そのつぎの第六ページから土岐の『青春の費消と屈辱の歴史』がはじまっていた。

「新潮」の巻頭近いページに、それも太宰の文章とぴったりならんで自作が掲載されていることは、土岐の自己愛をじゅうぶんに満足させるに足りた。太宰治は、土岐がその人たちを追いもとめて上

京してきた、いわゆる〝愛人〟たちの中でも最上位に位置する人物であったからだ。

太宰治は誤解と見当はずれの批評に取りかこまれていて、自分こそ、ただ一人の太宰文学の理解者だと土岐は思いこんでいたが、殊に「新潮」三月号から掲載されはじめた『如是我聞』は、太宰の書くものにはめずらしく生な言葉で、なりふりかまわず本音を吐いていて、いかにもイノチガケふうなところが、土岐ごのみであった。そして、三月号に掲載された第一回は、全文をあげて老大家を攻撃しているのだが、例えば「〈老大家には〉優しさということがわからないのである。つまり、私たちの先輩は、私たちが先輩をいたわり、かつ理解しようと一生懸命につとめているその半分いや四分の一でも、後輩の苦しさについて考えてみたことがあるだろうか」という個所などは、土岐の共感をそそって、彼をいても立ってもいられない想いにさせたほどであった。

土岐は、むろん、太宰の書いている老大家に田辺元を当てはめて読んでいた。京大創立五十周年のときの土岐の記念講演を田辺博士は完全に黙殺して、批評めいた言葉のカケラすら与えなかった。講演の準備についやした土岐の懸命な努力に対して、推薦者である田辺博士から一言のねぎらいの言葉もなかったという残酷な事態は、彼を絶望の淵につきおとした。そして、憤懣は怨念をよんだ。太宰治の颯爽たる、それでいて苦渋にみちた老大家攻撃は、土岐にとって、田辺元へ向ける彼の怨念を如実に代弁してあまりあるように思えたのである。

〝愛人〟として太宰を渇仰する想いは、これによって倍加し、同時に、土岐の上京の決意は確乎としたものとなった。つまり、三高・京大での教師の職を棄てて上京する決心を彼にうながした出発点は、京大創立五十周年記念講演後の田辺博士の態度にあったようだが、じっさいに上京という行為を実行にうつすバネとなったのは、太宰治『如是我聞』の最初の部分であったといえた。

「新潮」六月号の巻頭に掲載されている『如是我聞』第三回も老大家攻撃の文章だったが、後半は名指しで志賀直哉に嚙みついていて、アマチュア、エゴイスト、成金と罵倒するかと思えば、薄化粧したスポーツマンだの、腹掛丼の似合う植木屋のおやじだのと、云いたい放題である。走り読み

しかけた土岐は、痛快とも壮絶とも名状しがたい感動に捉えられて、始めからまた読み返す始末だったが、

重ねて問う。いのちがけで事を行なうは罪なりや。

という一行などは、太宰ファンの彼をあらためて酔わせるにじゅうぶんだった。

口ぎたなく悪口雑言をならべていながら、太宰の文章があくまで格調正しいのにひきかえ、『如是我聞』のすぐつぎのページから九ページにわたって掲載されている土岐の、エッセイとも小説ともつかぬ、えたいの知れぬ文章は、支離滅裂、文意散漫をきわめ、作者の云わんとするところが、まず誰にも理解されるはずがないと思える厄介な代物であった。おまけにその作品が、太宰の重視する有羞(うしゅう)の精神や粋やデリカシーとは正反対の、ほとんど読むにたえないほど泥くさく不粋な表現に終始していることに、作者自身は少しも気づいてはいなかった。

もっとも、鎌倉山の宿で書きとばしたこの作品を、読むのがこわいという、なぜかわからぬ理由から、土岐は、活字になったそれを読み返してみようとはしなかったが、『青春の費消と屈辱の歴史』の最後は、つぎのようにしめくくられているのであった。

太宰君、その時まで貴方にお目に掛る心の余裕が僕にはないのです。お目に掛りたくて、どれ程切なく貴方のことを思い出そうとも、幸福を同伴してお尋ね出来る様になる迄は、貴方にお目に掛ることは何だかまぶしくて気恥しくて、悲しくてならんのです。（傍点、作者）

その時までというのは、すぐ前の文章によると、「僕が幸福と共に貴方の仕事部屋を訪れ、貴方の祝福を受けに行かれることが出来る様になるまで」という意味らしい。そして、幸福とは、「僕の心をひきつけて離さぬ美事な宝玉」のことで、「若し僕がこの幸福をつかみ切ったら、きっと第一番に君のことを思いおこすと思います。そして早速、君の処へかけつけると思います。万一にも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com